

Title	都市防災のための地域劇団創成プロセス
Author	中川 眞, 福島 祥行
Citation	都市防災研究論文集. 1 巻, p.43-49.
Issue Date	2014-11
ISSN	2189-0536
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学都市防災研究プロジェクト
Description	
DOI	10.24544/ocu.20191218-004

Placed on: Osaka City University

都市防災のための地域劇団創成プロセス

中川真¹⁾・福島祥行²⁾

1) 大阪市立大学 大学院文学研究科 e-mail: nakagawa@osaka-cu.ac.jp

2) 大阪市立大学 大学院文学研究科 e-mail: fukushim@osaka-cu.ac.jp

文化による都市防災（実践）研究の一環として、大阪市立大学都市防災研究プロジェクトが運営するスギモト・アクト・カンパニーを事例とし、その設立経緯、現在に至るプロセス、防災効果などを論じる。設立の目的はメンバーのコミュニケーション能力を高めることを通して災害時における地域の連携リーダーを養成するというものであるが、それが確実に果たされているか、参加メンバー（地域住民）へのインタビューを通して検証する。ほぼその目的に向かって順順に推移しているという結論に至った。

Key words：演劇、文化資源、コミュニケーション、課題解決

1. はじめに

本稿の目的は都市防災に果たす地域劇団の役割や意味について、スミヨシ・アクト・カンパニー（以後、カンパニーと略）の事例をもとに考察するものである。カンパニーは2012年12月に本学の防災研究チームの中川、福島、森、生田らが地域住民に呼びかけて設立した。防災を旗印として大学が地域劇団を運営しながら研究へフィードバックするといった実践例は珍しく、先行研究も乏しいことから、できるだけ丁寧に今日までのプロセスを紹介しつつ考察を進めていきたい。

カンパニーが設立された背景には、2006年のジャワ島中部震災や2012年の東日本大震災を通して、コミュニティ復興に果たす文化の役割が改めてクローズアップされた点が指摘される。被災地には必ず文化があり、それもまた大きな被害を受けるが、復興する対象としての文化は、目に見える有形文化財（建築や美術）を除いて、極めて低い優先順位に置かれてきた。もちろん生命優先の救助、救援現場では水、薬、テント、衣類、医療関係者などの提供・派遣は急務であり、病院、学校、道路、橋梁、ガス・電気などの公共的な生活インフラの回復は必須である。しかし文化復興は二次のものとして扱われ、とりわけ無形文化財（音楽、演劇、芸能などの上演芸術）は最後尾となる。

本研究では、そのようなあり方を批判的にとらえ、「文化の復興」ではなく「文化による復興」を視座の中心に据え、文化を復興の対象ではなく復興のためのメディアという観点から、その可能性を追究したい。すなわち文化は復興の最前線において活用され得るという立場から、その可能性、妥当性、説得力を見極め、確認したいのである。ま

た災害後のみならず災害前、すなわち防災にも役立つという観点をここでは強調する。その結果として、本考察は社会包摂型の文化を定位するためのバックグラウンドを提供することにもなると期待される。

2011年の東日本大震災の後、防災活動に演劇を取り込む試みは活発化してきたように見える。災害の発生を想定する劇を行い、そのなかでどのような行動をとるべきなのかを具体的に演じていくことによって減災・防災を啓発するものや、三宅島の噴火やニューヨークの世界貿易センタービルのテロなど実際に起こった出来事を演劇化して災害の風化を防いだり生き延びる知恵を教えたりするものなど、種類や方法は多岐にわたっている。また可児市の例のように多文化共生プロジェクトの活動のなかから、災害時の情報伝達や防災意識の啓発をテーマとするファシリテーター養成のワークショップを演劇的手法で行う試みも始まっている¹⁾。演劇はコミュニケーションを表現の中核とするから、学習的な側面で使用されることは十分予想できる。昔話の語りのなかには災害をテーマとするものも多く、聴き手はその知恵を継承していく。

但し、実践例は数多くあるものの、反省的に考察した例はそれほど多くない。その数少ない考察例に平田オリザが研究代表者とする「犯罪からの子どもの安全」という研究プロジェクトがある²⁾。これは演劇ワークショップの手法を用いて防犯啓発劇を子どもたちが自ら作り、発表までを行うプログラムの研究開発を行うものである。「主体的に学習に参加し、頭と五感で体得する」ことをキーコンセプトとし、劇の練習と発表を通じて、疑似体験とその記憶の定着をめざすものである。この研究プロジェクトは実際に

社会実験を行い、その効果等の評価を試みている点で、問題意識としての出発点が我々の研究と共通点があることから、先駆的な実践研究であるといえよう。

演劇は「ひとり芝居」を除いては、基本的に複数の人々による共同作業である。たとえひとり芝居においても、照明や音響、舞台監督といった裏方が役者を支えている。

NPO フリンジシアタープロジェクトは演劇による防災ワークショップにおいて、その効果として「当事者意識を身につける」「コミュニケーションスキル」「実感すること」「他者への想像力」「責任感」の5つを挙げている³⁾。演劇という形式は集団的行動における重要な規範を学ぶのに適していて、それが防災にも応用可能なのである。

本稿執筆者の一人である中川は2006年のジャワ島中部震災や2011年の東日本大震災を通して、音楽や演劇によるコミュニティ復興支援に携わってきた。ジャワ島ではガムラン音楽、東北では山伏神楽を媒体として、それぞれの復興にかかわっている。そこでの音楽や芸能に対する見方は以下の通りである。「芸能には2つの力があるだろう。ひとつは『祈り』であり、もうひとつは『絆（つながり）』だと私は思っている。アジア地域全般にいえることだが、古来より自然災害の甚大な地域ほど豊かな芸能が発展してきた。…（インドネシアは）周知のように津波、地震、噴火、洪水などが頻発する地域だ。そこには、ガムラン音楽をはじめとするアジアの精華ともいべき文化が生まれ、継承されている。東北地方の芸能もまた豊かなのは、地震、津波、冷害などの自然災害に絶えず襲われ、それに対抗する人々の強烈な恐れ、不安、祈りや願いがそこにあるからだ。神楽の巡行が毎年欠かさず行われてきているのは、漁民を中心とする信仰が生きている証左だ。芸能はカミあるいは自然と人、そして人間同士をつなげる役目を果たしている」⁴⁾。

祭りや芸能には、人々を結び合わせ、一体化させる機能が備わっていることは多言を俟たないだろう⁵⁾。しかし、それは防災といかに関係づけられ得るだろうか。復興のプロセスと同様に、防災もまた緊密なコミュニティの存在によって大きな効果を生む。日常的に人々が祭りや芸能を通して交流することが、隣人の顔がわからず孤独になりがちな都市の特性にブレーキをかける。コミュニティの形成いかんが、いざ災害を受けたときの死命を決するのであるとすれば、演劇や音楽による強力なコミュニティ形成力を防災に活かさない手はないと考えるのは自然であろう。

しかし、現在の都市でそれに相応しい芸能を見出すのは簡単ではない。大阪市立大学の地元（住吉区）も例外では

ない。東北地方の村落であれば、住民が参加する芸能は必ずといってよいほどあり、それがコミュニティ再構築のエンジンになり得るが、大学近辺でそういう団体を見出すのは困難であった。そこで浮上してきたのが、芸能に代わる「劇団」の創成であった。それがコミュニティの防災の核としての地域劇団結成というアイデアだったのである。


2. 設立から2回の公演まで

カンパニーの設立に向けて、教員間で具体的な意見交換を行ったのが2012年11月であり、募集する地域的範囲、活動目標、暫定的なスケジュールを確定させたのち、地元住民へのオファーを行った。募集地域は大学に来やすいことを念頭に住吉区と設定し、防災イベントを通じてこれまでコンタクトのあった山之内地区のNPO スマイル協議会に協力を仰いだ。スマイル協議会は地域住民の活発な交流を目的として2012年に法人化され、「地域コミュニティの活性化」と「すみよいまちづくり」をキーモットーとしている⁶⁾。約40年の活動実績をもつ地域活動協議会の老舗であり、防災訓練や防災マップ作成も行われてきた。そういう意味では、既に防災に関するコミュニティ核になっていたともいえる。では、なぜそこにカンパニーを付け足そうというのであろうか？

それは演劇がメンバー相互のコミュニケーションを飛躍的に活性化させ、メンバー間の関係の質を変えるのではないかと想定するからである。具体的な事例は後で報告するが、カンパニーの存在が住民の意識を少しずつ変えていったことは事実である。

さて、スマイル協議会の複数のメンバーをパートナーにして若干の広報活動をした後、2012年の暮れに第1回の公式会合をもった。地域劇団に参加したい人に来ていただき、今後の予定等を決めようという目的であったが、会合は始まったものの出席者は市立大学の教員と協議会の役員のみであり、大きな不安がもたげてきた。こういう取り組みは地域住民に魅力がないのではないかと。だが、しばらくして1組の親子が現れた。父親と幼稚園児（女性）だ。広報を見て、参加したいとのこと。その子どもは恥づかしそうに微笑んでいる。「しめた、アイドル誕生！」と、そこに出席していたメンバーの誰しもが思った。まずは小さな灯火がともった。さらに年末の「火の用心」の町内廻りに合わせてチラシを配り、広報活動を強化するなどを決めて、2013年1月に第2回の会合をもち、徐々にメンバーが集まっていった。

劇団員募集 説明会ご案内



いのちを守る都市づくり
みんなで考える防災総合計画

大学が、皆さんとともに、**全く新しい劇団**をつくりたいと思っています。
その名も、スミヨシ・アクト・カンパニー！
大学が地域と共存するために、皆様に何かお役にたきたいと願っています。
地域の問題を解決したり、未来の住吉像を提案したり・・・
しかし論文では、皆さんの心に届きません！
そこで、**演劇**という方法を思いつきました。
しかも、**地域の皆さん**とともにつかっていきたいと。

第1弾は、防災をテーマに「いのちを守るまち」という演劇をつくります。
上演は、**3月16日(土)午後、市大のステージ**で(一般公開)。
稽古、演出、制作は市大が誇る2名のエンターテインメント教授が担当。
専門家の指導が受けられます。

参加していただきたいのは、住吉区に住む方で、
演劇経験は全く問いません。
小学生から高齢者の方まで募集します。
口べたな方、引きこもり傾向の方も大歓迎。
もちろん、表現力を高めたいと思っている人も。

稽古は原則として**木曜の19:00-21:00に大阪市立大学にて**行います。
木立のあるキャンパスのなかで、大学ライブが送れます(見学ツアーも開催)。
約10回の稽古のうち、半分以上の参加が条件です。
会費などはいっさい不要です。
キャスト以外に、スタッフ(小道具、衣裳、効果音など)希望も大歓迎。

みなさん、1月10日に会いましょう！

説明会日時：1月10日(木)午後7時から
説明会場：和(やわら)び会館(住吉区山之内4-3-13)
募集人員：小学・中学生(数名)、成人(2~3名)、高齢者(2~3名)
企画・主催：大阪市立大学都市防災研究グループ(代表 森一彦 生活科学研究科教授)
問い合わせ/説明会参加申込先：
06-6695-2041(京村賀代子/山之内スマイル協議会・震災ネットワークファイル作成委員会)

図1 劇団員募集のチラシ（2013）

劇団結成の趣旨をもういちど、第2回公演の当日配布プログラムに載せた文章から抜粋し、確認しておこう。「『防災』を旗印にしていますが、啓蒙的な防災劇ではありません。むしろ、劇団活動を通してメンバーがコミュニケーション能力を高めたり、いざというときに地域の連絡リーダーとなったりしながら、劇団が地域コミュニティの風通しをよくするための活動の核になってほしいという趣旨に基づいて結成されました。…ひとつの観点に『文化による地域復興・再生』という取り組みがあります。特に、民俗芸能の果たす大きな役割に注目し、岩手県の神楽などを応援してきました。その際に、芸能や祭の盛んな地域ほど復興の早いことが確認されました。仮設住宅にバラバラに住んでいた人々はお祭りがあると集まります。それがコミュニティの再生の第一歩になるのです。祭りの中心にあるのが民俗芸能です。今後起こり得る西日本での大きな震災に備えるのなら、そのような文化的な仕組みを作っておくことが重要ではないかという考えが生まれてきました」⁷⁾。

このような趣旨のもとによって、劇団メンバーに期待されるのは自主性、自律性といった行動規範の獲得である。つまり、劇団活動でメンバーがどれほど当事者意識をもって運営や表現に積極的にかわるかである。それによって、災害が起きたときに臨機応変に対応できる力の身のつき方が違うであろうという仮説に基づいている。その目標がどの程度まで達成されたかということが、劇団活動に対す

る評価指標となる。そういう意味では、演劇そのものの表現内容（テーマや演技等）は評価の前景から若干退く。つまり重要なのは公演までのプロセスなのである。

第1回公演は2013年3月16日に市立大学学術情報総合センター内の特設ステージで開催された。タイトルは『時のしずく -いのちを守るまち1』（作：スミヨシ・アクト・カンパニー、演出：福島よしゆき）である。練習は1月24日より開始したが、オリジナル台本を作ることから始めたため、時間的には相当切羽詰まった状況であった。

「様々な災害が劇のなかで起こり、それを皆で乗り越える」というのを基本コンセプトとして、メンバーが台本づくりを開始したのが1月後半である。その時点で10名以上の参加をみている。自由に意見を出し合ってストーリーのパーツを揃えてゆく。なお「いのちを守る」というのは、市立大学の防災科学チームのもつ基本的コンセプトでもある⁸⁾。実際の練習は2月から3月にかけて計15回行われた。できあがったストーリーは以下の通りである。

◎震災にそなえた大規模の避難訓練がおこなわれている住吉区のとある家庭で、小学生けんとかがテレビを見ながらだらだらとすごしていた。母親に怒られふてくされているところにピーターパンがあらわれ、友人ふみなとともに、ピーターのお母さんをさがす、時間をこえる旅につれだされてしまう。一方、ピーターの謎の力をねらうポケット団のナニワとコシローも、お笑い芸人見習いのよしきとともに、ピーター一行を追って、時間をこえる旅に出る。旅立ったピーターたちとポケット団たちは白亜紀に到着、アイドルひなたや謎の保険勧誘員にであう。そこで一行は恐竜にのみこまれるが、謎の消防団員の指示により、恐竜から脱出することができた。つぎに一行が飛ばされた先は戦国時代、織田信長の住吉の陣。柴田勝家、明智光秀、細川藤孝という三武将にあやしまれ、本願寺と三好康長の手が迫るなか、アイドルのことがばがヒントになって脱出する。最後に一行はゾンビ・ウィルスが蔓延する未来都市に飛ばされ、ゾンビに襲われる。つぎつぎとゾンビ化してしまう仲間たち。一行最大のピンチにおちいるが、見習い芸人こと科学研究者であったよしきの、しかしながら研究とはまったく無関係な活躍によって、そのピンチを克服する。かくして、さまざまな危機をはからずも協力しながら乗り越え、元の時代にもどってきたピーターとポケット団たちは、ひとりの女性に出会う。ピーターは例によってお母さんかいと尋ねるが、否定する女性。そこに各時代にも姿をみせていた謎の人があらわれ、ジェスチャーでメッセージを伝えたえたたん、大きな地震がおこり……。さまざまな体

験を通じて、一同は、今できることを少しずつおこなっていくことが、時の流れをつらぬいて未来の安心・安全につながることを知るのであった。◎



図2 第1回公演より

結局、地域住民のメンバーが創案することができたのはバラバラの場面であった。タイムマシンに乗って主人公が様々な災害に遭うという大まかなコンセプトは示されたが、それらの場面をどう繋ぐのか、個々のセリフをどうするのかという点については、演出の福島よしゆき（祥行）に委ねられた。練習時間を確保するためには、2月中旬がタイムリミットだったためである。福島は場面案を引き取り、台本を完成させた。結果として、そこにメンバーが提案していない2つの場面が組み入れられた。すなわち冒頭の「こどもはみんな、おとなになります…」という女性のセリフとそれに続くファンタジックな場面（ピーターパンと女の子）、そして最後の「こどもはみんな、おとなになります…」という母による同じセリフの場面である。演出者の意図としては、いのちあるものへの全てを貫く「祈り」のようなものを付け加えたかったのである。

第2回公演は2014年4月5日に大阪市住吉区・区民センターで開催された。タイトルは『ひかりはそこに - いのちを守るまち2』（作：スミヨシ・アクト・カンパニー、演出：福島よしゆき）である。第1回の反省を踏まえて、台本づくりを9月から始め、12月までストーリーづくりに専念した。その際には、福島をはじめ市立大学の教員は極力意見を挟まないようにして、住民の自発的な進め方に委ねた。結果として、ストーリーのかなり細部に至るまでメンバーで作ることができた。それを福島が受け取り、上演台本として整備したのは2014年1月である。練習は1月から3月にかけて計20回行われた。

ストーリーは以下の通りである。

◎巨大震災がおこった大阪のとある街。近所の人々が避難

してきた小学校の体育館。ひとりが腕時計がなくなったとさわぎだすと、ほかの人々も財布や鞆がないとさわぎだす。混乱におちいろうとしたところへ、ひとりの男性が急に苦しみだし、倒れる。一同があわてているところへ、探偵が秘書と助手をつれて姿を現し、殺人犯を追っていると告げる。そんなことよりドロボーを捜せと騒ぐ人々を無視して殺人犯を捜そうとする探偵たちに、リングの貞子に似た貞子2（ツ一）や、魔女っこ、吸血鬼らが加わる。だが、大きな余震がおこり、出入口のドアがゆがんで開かなくなってしまい、皆は体育館に閉じこめられてしまう。ラジオのニュースにより、体育館のある地区で火災が広がっていることを知った一同は、あわてて脱出方法をさぐることになる。ところが吸血鬼はコーモリに変身して屋根の隙間から脱出するも、陽の光にあてられて墜落。魔女っこはパワーがたりず、貞子2の力に助けてもらおうとするが、貞子2のマイナス・パワーが強すぎて、逆にパワーを吸いとられてしまう。忍者は空腹でなににもできない。そのころ、体育館の外では近所の人々が集まって、閉じこめられた人々を心配していた。そこへ自称霊能力者の谷町六丁目さんが現れ、報酬とひきかえに内部を霊視する。一方、体育館の内部では、ひとりが大けがをして輸血が必要になる。あわてる一同だったが、吸血鬼がおやつ用に隠し持っていた血液をつかうことで助かる。さらに体育館に隣接している防災備蓄倉庫への通路を発見することで、食糧問題も解決。残された問題は殺人犯だけとなる。はたして殺人犯はみつかれるのか、皆は脱出できるのであろうか…。それぞれが力を出し合うことで、人々は互いのいのちを守るのであった。◎



図3 第2回公演より

2作目は、1作目と異なって、大半の場面が密室（地震によって閉じ込められた体育館）であるため、会話場面が

中心となり、同じく1時間弱の上演時間であったが、セリフが大幅に増えた。似たような場面が連続するためか、公演時に役者（小学生）がセリフを忘れ、2分以上の沈黙の時間が生じるというアクシデントも起こった。また、第2回公演はより多く住民に見ていただきたいという理由から区民ホールを借りて開催されたが、広報・動員などに慣れておらず、観客が少なかったという問題も残った。台本を作った福島はストーリーに殆ど手を入れていないが、わずかに最後に輝くクリスマスツリーの場面をつけ加え、希望の光を暗示して劇のピリオドを打った。

3. 分析

本節では、主として地域住民に行ったインタビューから得られた情報をもとに質的分析を行い、カンパニーに対する現状の評価を導き出す⁹⁾。主として、[1] 相互コミュニケーション（ネットワーク）、[2] 自主性、自律性、[3] 防災意識の3つの観点から、それぞれがどのように変化あるいは深化したのか考えてみたい。

まずその前に、地域住民がどのような目的や意図でもって活動に参加しようとしたのか紹介しておこう。

- みんなと力を合わせる経験を子どもにしてほしかった。（女性、42歳）
- 自分の子どもはこれまで習い事など長続きせず、みんなと一緒にいたら続けられるかなと思った。（女性、46歳）
- 日常のなかで緊張する場面がなくなった。自分の幅を広げたいと思った。防災というテーマにも関心があった。（男性、61歳）
- 都会では祭りなどに参加する機会がなく、楽しいことが何かないかと探していたときに出会った。（女性、50歳）
- 広報などのお手伝いだけをするつもりでいたが、いつの間にかやら役者になっていた。（女性、61歳）

協議会の役員や知り合いに誘われてという者から、チラシを見て応募してきたという者まで、参入のプロセスは多様である。しかし「何となく」というのではなく、かなり明確な動機をもっているのがわかる。

さて、[1] 相互コミュニケーション（ネットワーク）についてであるが、カンパニーに参加して起こった変化に焦点をあててみよう。当然のことであるが、参加することによって新たな人脈が形成される。

- カンパニーに入っていなかったら、これほど色んな人と知り合いにならなかった。（女性、61歳）

- 互いに近所に住んでいたんだけど、ここに来て初めて知り合えたのが良かった。（女性、38歳）
- 違う小学校の友だちが増えた。（男性、10歳）
- ふだんはプロ級の人たちと一緒に演劇をしているけれど、そこでは礼儀作法ひとつとつてもしんどい。しかし、カンパニーでは気楽な感じで振る舞えるし、年齢が随分離れている人とも話せるところがいい。（女性、11歳）

最後の女性が指摘するように、メンバーは5歳から70歳近くまで、最大で60年以上の開きがある。通常の劇団ではこれほどの年齢差を抱え込むことはないであろう。人数も徐々に増え、第3回公演をめざすメンバーは20名を超えている。なかでも小学生が増加しつつあるのが特徴である。10歳男性は小学校よりも面白いという。その面白さは、校区を超えた友だちができること、様々な大人と付き合えることのように見える。

1年目より2年目、3年目と時間が経つにつれ、カンパニーにはひとつのコミュニティのような結束感が出てきた。その画期的な出来事が、2014年9月14日の地区の敬老大会において、カンパニーのメンバーが中心となって上演した「防犯劇」に現れた。脚本はカンパニーの男性（61歳）が書き、それを皆で意見を述べ合って修正したという。これはカンパニーの活動があつてこそなし得たことである。この件には市立大学の教員は全く関与しなかった。メンバーはこれを経験することによってカンパニーの連帯度が一段階あがったように感じている。

[2] 自主性、自律性については、必ずしも教員側の意図は浸透していない。最も判断しやすい局面は台本作りである。

- 台本を我々で作るのはしんどい。何か得るものがあるのか、分からない。先生方にもっと台本に手を入れていただきたい。（男性、61歳）
- 自分でやりますって手をあげることはできない。どうしたらいいのかわからない。できあがっている台本をもらって役作りをする方が楽しい。（女性、60歳）
- 台本作りよりも、練習に早く取り組みたい。（女性、50歳）

オリジナル台本を作るのはかなりの負担のように見える。劇団員を募集すれば、通常は役者あるいは裏方として公演の準備をすることが活動の中心になる。しかし、カンパニーでは公演の結果よりはプロセスを重視し、なかでも台本作りが大きなウェイトを占める。そういった大学側の意図と参加する住民の期待ベクトルが、ここではずれ違っ

ているように見える。実際、台本作りの段階ではある種の「もたつき」が見られ、現在は3回目の台本作りに取り組んでいるところであるが、なかなか効率よく前に進めない。しかし、それを積極的に評価する声もある。

- ・ 公演にクオリティを求めるのなら役者にプロを混ぜ、台本も完成度の高いものを持ち込めばいいが、カンパニーでやっているのは、台本作りに見られるように「実験的な試み」であり、それはそれで意味があるのではないかと思う。(女性, 42歳)

この発言はカンパニーが通常の市民劇団ではなく大学が企画する劇団であるがゆえに、そこに何らかの実験的要素が含まれていることを理解してのことである。但し、教員たちは敢えてそういう意味づけを説明していないために、前出のように、なぜこんな手間なことをするのだろう、という疑問や不満が出てくるのである。

[3] 防災意識については、次のようなコメントが出ている。

- ・ 特に災害なんか意識しない。(男性, 10歳)
- ・ これまでの小学校での避難訓練はダルかったけれど、ちょっと大切なと思うようになった。(女性, 11歳)
- ・ 災害は身近にあるのかなと思うようになった。次の地域の防災訓練には出ようと思う。(女性, 38歳)
- ・ 阿倍野の防災センターに行って、地震体験などしてきたらどうだろう。(男性, 61歳)

総じて防災意識は高まっているように見える。カンパニーの公演では第1回はタイムマシーンで色々な時代に飛んで、災害アラカルトのような状況、また第2回では逆に大地震によって密室に閉じ込められたかなりリアルな状況を設定したが、いずれも避難訓練の代わりに果たしたり、行動規範を示したりするようなものではない。つまり啓発的な演劇ではない。従って、演ずることによって直接的に防災意識を高めてもらうような期待はあまりしていないが、波及的に関心は高まっていることがうかがえる。

4. 成果：今後に向けて

前節ではインタビューを基に、参加する地域住民の目線からカンパニーの評価を行ったが、当然のことながら、カンパニーに託す住民の期待・意図と、大学の教員側のそれとは多少異なる。その相違を整理しながら、現時点でのカンパニーの総括を行いたいと思う。

地域住民のカンパニーに対する期待は、ひとつの特徴をもっている。すなわち、「演劇をしたい」というよりは、「皆と一緒になかをやりたい」というものである。つまり、

コミュニティ志向の人々が集まったといえる。そして[1]相互コミュニケーションで分析したように、その期待は「カンパニーに入っていなかったら、これほど色んな人と知り合いにならなかった」というように、かなりの満足度をもってかなえられている。そういう意味では、十分にネットワークを作るための入り口を果たしているのではないかと考えられる。

しかし、大学側が望む「自主的、自律的な」行動様式の獲得はどうであろう？ この点に関しては、教員側の意図は浸透せず、台本作りの意味ははっきりとは理解されていない。関連して次のような要望が聞こえてくる。

- ・ 稽古にもっと時間がほしいし、演技指導をもっとしてほしい。(女性, 46歳)

実際に人前で演技をするのであるから、参加者の関心は公演の出来に集中してゆく。では、なぜ教員がメンバーに最も核となるようなキーコンセプトを丁寧に説明しないのであろうか？ 教員は「気づいてほしい」と思っているからである。キーコンセプトは声高に話し、押しつけるものではない。最も重要な部分こそ気づいてほしいと願っているのである。

その点に関連して、嬉しい出来事があった。それは前述したように、カンパニーのメンバーが自分たちで話し合っただけで敬老大会の出演を独自に決め、台本を作って上演し、好評を博したことである。教員は終わってからその事実を知らされた。これこそ、彼らは自然に、自主的に、自律的に行動したケースである。カンパニーは、教員から自立し、住民たちによって自主運営されることによって最終的に完成する。教員はその日までじっくりと付き合おうと覚悟している。

カンパニーの目標は、前述の通り、メンバーが当事者意識をもって運営や表現に積極的にかかわることによって、災害が起きたときに臨機応変に対応できる力を身につけることにある。それがどの程度まで達成されたかということが、劇団活動に対する最もシリアスな評価項目になるであろう。もちろん演劇活動の目標は極めて多様であり、このように言い切ってしまうことに違和感もあるが、当面のフォーカスはここに当てている。そういう点での評価でいえば、「災害が起きたときに臨機応変に対応できる力」は実際にそういった場でないと検証できないゆえに、非常に見極めにくいことは確かであるが、メンバーが自主的に動き始めた部分を見ればプラス効果であろう。しかし、皆がいまだもって心に棘のようにささっているのは、第2回公演のときのセリフ忘れによる2分以上のステージ上での

沈黙である。これは10歳の小学生(男性)に起こったものであるが、他の誰かが臨機応変に対応して手を差し伸べ、その状況を回避できなかったことへの苦い思い出がある。そのときに自分は何もできなかったと自責を感じ、第3回に参加できなくなったメンバーがいるほどである。あの状況もひとつの「災害」であったし、それを適切に乗り越えることができなかったという重い課題が残っている。

災害は、それこそ想定できるものではなく、突然襲ってくる。そのような運命的猛威に抗うのが防災活動である。それは1勝9敗くらいの勝ち目のない戦いかもしれないが、その1勝が貴重なのである。防災は全能ではなく、いのちを守るための負け戦覚悟の勇氣ある戦いへの挑戦と捉える必要があるのではないだろうか。

注

- 1) 各務真弓 (2013) 「演劇の手法は情報伝達に有効か ～ 防災ワークショップのファシリテーター養成講座の実施報告」, 自治体国際化協会『自治体国際化フォーラム』8月号 Vol.286:39-40.
- 2) 公開資料 平田オリザ監修『演劇WSをコアとした地域防犯ネットワーク構築プロジェクト』2013, 同2012, 同2011, 同2010.
- 3) <http://www.fringe-tp.net/engekide/> (2014年9月30日にアクセス)
- 4) 中川真 (2012) 「被災地の復興におけるアートの役割」, 大阪市立大学都市防災研究グループ(編)『いのちを守る都市づくり(課題編)』大阪公立大学共同出版会:225-235.
- 5) 福島祥行 (2012) 「都市・境界・アート——コミュニケーション空間の相互行為的生成について——」都市研究プラザ編『URPGCOE DOCUMENT』13, 水曜社:72-81.
- 6) <http://www.city.osaka.lg.jp/sumiyoshi/page/0000194554.html> (2014年9月25日にアクセス)
- 7) 中川真「ご挨拶」. 2014年4月5日当日配布のプログラムのなかから.
- 8) 「いのち」に関連する取り組みとしては、森一彦教授(生活科学研究科)を中心とする「いのちラボ」プロジェクトがある。仮設的なスペースを組み立て、内部にいのちを守るための諸情報を設置するとともに、共同学習や発表、パフォーマンスが可能な臨時施設である。2014年5月より大阪市立大空小学校(住吉区)に設置されており、授業や課外活動、住民啓発等のために運用されている。大空小学校の教育モットーも「いのちを守る授業」の創発、展開である。
- 9) 住民メンバーへのインタビュー(2014年10月2日[6名]と10月3日[4名])。